

南湖におけるホンモロコの再生産状況調査

米田一紀・根本守仁・大植伸之

1. 目 的

かつてホンモロコの主要な産卵場であった南湖は、現在ほとんど産卵が確認されなくなっている。そのため、標識種苗放流、水草刈り取りおよび外来魚駆除を行い、南湖での再生産を回復させる取り組みを行っている。本項では親魚の南湖への回帰状況、平成 29 年の放流地点である、下笠地先および赤野井地先周辺水域での産卵結果を報告する。

2. 方 法

① 親魚来遊状況調査：平成 30 年 3～8 月に、南湖に設置されたエリ（東岸側 3 地点、西岸側 1 地点）において、ホンモロコ親魚の採捕状況調査（以下、「エリ調査」という）を行った。採捕されたホンモロコ親魚は ALC 耳石標識を確認した。

② 産卵状況確認調査：旧草津川河口から下笠造成ヨシ帯間のヤナギ林（以下、「下笠調査地点」という）および赤野井湾内のヤナギ林（以下、「赤野井調査地点」という）において、3 月 22 日～6 月 22 日に計 14 回、週 1 回の頻度で産卵の有無を調査した。

3. 結 果

① エリ調査では、ホンモロコ親魚 460 尾が採捕され、うち 24 尾が平成 29 年に下笠地先で放流された標識魚、19 尾が赤野井沖耕耘区で放流された標識魚（以下、赤野井放流魚）、117 尾が赤野井水田より放流した個体（以下、赤野井水田放流魚）であった。これらは放流地点付近のエリで多く採捕される傾向にあった。生殖腺の状態確認では、いずれの個体も生殖腺の発達が確認され、産卵のために来遊した可能性が高い。

② 下笠調査地点では、平成 30 年 5 月 23 日および 6 月 1 日の調査で小規模な産卵が確認された（図 1）。同地点で産卵が確認されたのは 3

年ぶりであり、下笠放流魚の冬季までの生残率（4.3%）が昨年度まで（0.2～1.7%）と比較し高かったことが、親魚の来遊尾数の増加につながった可能性がある。赤野井調査地点においては、ホンモロコの広範囲にわたる産卵が確認された（図 2）。同地点では、少なくとも平成 28 年以降、複数回の調査日において産卵が確認される状況が続いているが、エリ調査の結果を加味すると、赤野井放流魚および赤野井水田放流魚が赤野井調査地点での産卵に寄与した可能性は高い。

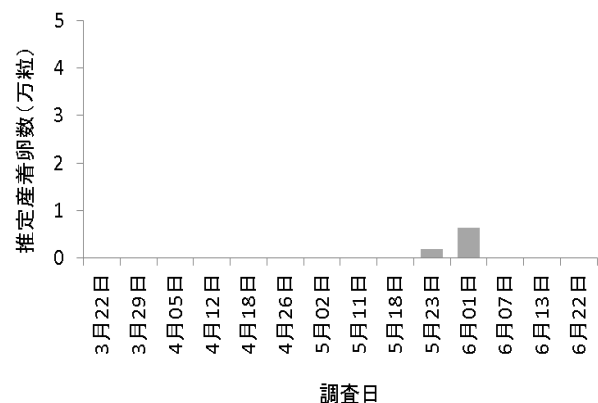


図 1 下笠調査地点における推定産着卵数

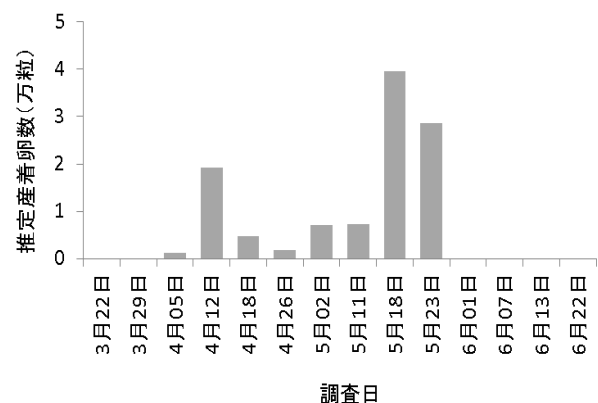


図 2 赤野井調査地点における推定産着卵数